

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	熊谷 慎之輔
2. 審査委員	主査：（岡山大学教授） 尾上 雅信 副主査：（岡山大学教授） 寺澤 孝文 委員：（岡山大学教授） 黒崎東洋郎 委員：（兵庫教育大学准教授） 大野 裕己 委員：（岡山大学准教授） 高瀬 淳
3. 論文題目	教師の職能発達を支え促す「学校・家庭・地域の連携協力」のあり方に関する研究
4. 審査結果の要旨	<p>論文提出による学位申請者 熊谷 慎之輔 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成27年2月11日（水） 13時00分～14時00分 場所：岡山大学教育学部 本館 教育学演習室</p> <p>（1）学位論文の構成と概要</p> <p>本論文は、以下に示す、2部・全8章から構成されている（節以下は省略）。</p> <p>序 章 課題の設定</p> <p>第I部 教師の職能発達と学校・家庭・地域の連携協力～「世代性」と「かかわりの中での発達」に重点をおいて～</p> <p>第1章 スクールミドルの職能発達を考える視点と理論 第2章 スクールミドルの職能発達を促すキャリア・デザイン 第3章 スクールミドルの職能発達を支援する仕組み 第4章 「世代性」・「同僚性」・「学校・家庭・地域の連携協力」の関連性の検証</p> <p>第II部 「学校・家庭・地域の連携協力」の推進～連携をすすめる組織のあり方～</p> <p>第5章 学校支援地域本部事業からみえる「学校・家庭・地域の連携協力」の課題 第6章 「学校・家庭・地域の連携協力」を推進する組織づくり</p>

第7章 学校運営協議会と学校支援地域本部が連携した運営体制のあり方

第8章 教師の職能発達を支え促す「学校・家庭・地域の連携協力」の推進をめざして

終章 本研究のまとめと今後の課題

概要は、以下の通りである。

教師の職能発達を支え促す「学校・家庭・地域の連携協力」のあり方を考察することを目的とする本研究は、教師とくにスクールミドルの職能発達と学校・家庭・地域の連携協力との関係を明らかにした第Ⅰ部、それを踏まえて「学校・家庭・地域の連携協力」の推進、とりわけ教師を含めた学校にかかわる大人たちの発達や成熟を支え促す組織のあり方について考察と提言を行う第Ⅱ部からなる。

第1章では、生涯発達論やキャリア発達論の視点から中年期というライフステージを生きる教師の職能発達についての考察を行っている。中年期を「危機的移行」の時期と特徴づけるとともに、その段階におけるジレンマも明らかにした。

第2章では、中堅・中年期の教師、すなわちスクールミドルの職能発達をキャリア・アンカーとキャリア・サバイバルの視点から検討し、個人としての職能発達を促すだけでなく、学校づくりと職能発達双方を高めあう仕組みの重要性を指摘した。

その仕組みについての考察を行ったのが、第3章である。まずは教師同士の職能発達、とくに「世代性」「同僚性」の発達を促す場としての授業研究について考察し、さらに「学校・家庭・地域の連携協力」との関連について検討した。

第4章では、上記「世代性」と「同僚性」と「学校・家庭・地域の連携協力」の関連をアンケート調査により実証的に検討し、有意な正の相関を認め、教師の同僚性と地域との連携の有意なつながりを明らかにした。ここまでの第Ⅰ部で、スクールミドルの職能発達が学校にかかわる大人（地域住民）たちとのかかわりの中で促進されることを明らかにした。続く第Ⅱ部では、学校にかかわる大人たちの発達や成熟を支え促す「学校・家庭・地域の連携協力」のあり方、組織づくりについての検討と提言をしている。

第Ⅱ部初めの第5章では、学校・家庭・地域の連携協力の代表的な取り組みである学校支援地域本部事業について、概要と展開、さらに調査法によってその実際上の問題点の指摘を行った。続く第6章では、連携の中心となる推進母体について、事例研究を中心に検討を行った。学校運営協議会（コミュニティ・スクール）が有効な運営推進母体となり得ることを指摘し、その有効性を認めつつ新たな組織の枠組みの必要性を説いた。

そこで第7章では、学校運営協議会と学校支援地域本部が連携した運営体制に焦点を当て、具体的な事例研究を行い、インタビュー調査によって事例を四つのタイプに分類し、学校運営協議会と学校支援地域本部が連携した運営体制の有効性を明らかにした。

これらの検討を踏まえ、最後の第8章では、学校運営協議会と学校支援地域本部が連携した運営体制に関する全国調査を行い、調査結果から、地域主導型の運営体制が最良の運営モデルであること、逆に学校主導型には多くの課題が存在することを確認した。さらにこうした課題を抱える学校主導型のタイプを改善するために、「協働活動」とりわけサービス・ラーニングの有効性を指摘するとともに、それがまた、学校・家庭・地域の連携協力の推進と

それによる総体としての地域の教育力の創出をもたらす可能性をもった方法であることを提言した。

(2) 審査経過

本論文の審査において、主として次の二点について、従前の研究成果を超えるすぐれた成果を収めていることが高く評価された。第一に、「学校・家庭・地域の連携協力」にかかわる固定的な観念 — 児童生徒のための学校支援という観念 — を乗り越える研究視点の提案である。すなわち、連携協力を進める取り組みを、「大人と子どもの歯車モデル」によって説明することで、教師を含む学校にかかわる大人たちの学びや発達を支援する生涯学習の取り組みととらえる視点である。これは、学校づくりを地域づくりと相互に関係し合う一連のシステムとして捉えることにつながり、地域教育経営というべき研究分野への展望を開いた点で、評価された。第二に、学校・家庭・地域の連携協力をすすめるための推進母体として、学校運営協議会と学校支援地域本部、とりわけ後者が主導し連携した運営体制の有効性を実証的に明らかにした点である。このタイプの事例にあっては、地域の教育問題について地域住民が学び成熟する場となっている点を明確にした調査結果は貴重であると評価された。その一方で、本研究の不十分さも指摘された。たとえば、上記の推進母体のタイプ分け、なかでも現状では多数を占める学校主導型と少数の地域主導型の関係、とりわけその変容・移行プロセスについての検討、地域との連携による教師の職能発達の実証的な検討などが、今後の課題として残された点である。しかしながら、全体として本研究は、従来の教育学・学校経営学の研究枠組み・視座を大きく超える、いわば地域教育経営のあり方に関する研究に多大な展望を与えるものであると評価された。

(3) 審査結果

以上により、本審査委員会は、熊谷慎之輔の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であるとして、全員一致で合格と判定した。